

復員後、木材製材業
に従事

昭和二十九年十一月一日

法人設立、有限会社

須藤製材所代表取締役
役に就任

昭和六十三年十月

社長を辞任、会長に

就任

昭和六十三年十月二十七日

社団法人全木連関東

支部から木材振興に

より表彰を受ける

公選職歴

大子町議会議員に六期連続当選

昭和四十三年三月三十一日 一期一

昭和六十三年三月三十一日 六期

六期間中、大子町議会議長、茨城県町村議会議

長会副議長、全国過疎地域振興連盟理事などの役

職を歴任

茨城県町村議会議長会より永年勤続（二十四

年）により特別表彰を受ける

叙 勲 平成十（一九九八）年十一月三日 自治

功勞勲五等瑞宝章を受章

現在 社会福祉法人保内園副理事長

大子町退職議員会（やみぞ会）会長

シベリア抑留の思い出

茨城県 和 知 義 美

集団で耐えられたか

私はバム鉄道とシベリア本線をつなぐ支線の

駅・テルマに四年過ごした。

旧軍服は入ソ翌年には満服、ロシアの被服に、

そして帽子も。食器はしばらく飯ごうを使い宿舎

で食べ、食堂になったのは二年目あたりで、照明

はまだランプでした。宿舎の防寒補修、わら布

団、生活はすべてそこにあるものを利用する。靴

下の糸、手製の針もつくった。衣服の破れは、寒

さだけでなく凍傷の原因になる。夜トイレにも着

衣で身を護らなければならぬ。集団での暮らしはどこかでつながり支え合った。ソ連人も教えてくれた。

三年目、警備隊の兵舎に掃除にいったとき、食堂で兵士が賄い兵に水ばかりのスープだと怒っているのを見たことがある。岩塩をテーブルで砕いていた。戦勝国の兵士が？　と思った。

帰国してから敗戦後の窮乏生活の話聞いたが、家は開拓農家で食がなかったようだ。私のほうが、粗末でも日に三度の食事はあった。

地域によって差はあったが捕虜という境遇はどこも同じで、屈辱の思いや望郷のつらさはとても言いあらわせない。

年月・場所など書いたものもないので、記述に前後や間違いがあるかと思いますが述べてみます。

安全は二の次、

ノルマ（仕事の最低基準量）が第一
松材をトラックに押し上げている写真がある。

五人かな。急傾斜で大変。だんだん高くなると危険も増す。ノルマは何立米か、原木がすぐ近くない方がいいが遠くとなると大変だ。私は山で伐採したものを前後四人ずつ八人がかりで天秤で担いで搬出や、輸送されてきた貨車から原木の積みおろしをやった。危険労働と重労働とで、やせて休養所に入ったことがある。

体格一、二級は重作業、三級は軽作業。その下は休養（オカ）。全くうそみたいだが作業なしで、暇があるから将棋やマージャンをつくって夜遅くまでやっている連中には困ったものだった。

この選別はソ連軍医の体格検査で決まる。素裸にして尻の肉をつまむだけ。女傑のときもあり、やつぱり気恥ずかしかった。「ゼンブヌイデ」なんてしかられる。

入ソ直後はみんなやせた。その後、あんなお粗

末な食事なのに太った人もいるのだから、人間の環境への順応力には目をみはる。ひとところノルマ食など出たが、これはすぐ中止となった。

糧秣が規定どおりに支給されることは安心できるし落ち着く。あとは帰ることだけである。逃行など無理だとあきらめていた。

結局、病弱者がさきに帰された。毎年三月になると引揚船が再開される。今年は自分が帰れるだろうか、不安と期待の入りまじった気持ちで待ちわびた。

第二一二収容所・煉瓦工場はこの地域で一番きついとこると恐れられていた。この時期、仕事によって、収容所間の移動が多かった。私も二一二へ転属となったが幸い軽作業であった。煉瓦型の粘土をトロッコで乾燥室へ運搬するのは、機械に替わるのだから大変だ。

また、煉瓦を焼く窯の燃料・伐採もノルマが高い。私らの組は、焼き上がった煉瓦を窯から出す

仕事。まだ熱いうちに仕事をすする。外に積み上げた上に板切れを置くとやがて燃えだすのだ。

窯は四、五坪の広さで、最下層は火力が強くて陶器のような色で硬く変形しているし、最上層は生焼けでもろい。ベルトコンベヤーを窯から貨車にかけて煉瓦を積み込む。軽便鉄道の無蓋貨車である。そして作業報告には、窯から外へ搬出し、それを貨車に積み込むと二度の作業をしたように書く。なんとノルマ完遂だ。このあたり社会主義制度のノルマの盲点といおうか。同様なゴマカシは至る所にあつたろう。五カ年計画もこれではかかとなる。

私はこのあと町にもどり第二〇三収容所で製材所の勤務についた。五人一組の仕事で、製材機操作のマシニスト二人、製品運搬その他三人であり、昼夜二交代制。まきをたくボイラーのピストン上下運動で製材機は一・五メートルの鋸を何枚も取りつけ、原木から一度に何枚もの板を切り出した。

ノルマ以上の成績で、ここでは賃金をもらった。二百ルーブル前後。このころ黒パンが闇で四キログラム三十〜四十ルーブル。このロシア人監督は闇取引で憲兵隊に引つ張られた。所長の給料は大方ウォッカになり、飯はバレイショだ。いづれもシベリア流刑の囚人あがりである。囚人といつても凶悪犯などではなく経済犯が多い。ソ連では、ヤミでも国家への犯罪。まして戦時下だから。

日本人から見ると、ソ連人はいろいろのタイプがあり民族性も感じられた。

収容所の所長は大尉級で政治性も高い。作業監督はガリガリのノルマ主義で囚人あがりが多い。警備兵は融通がきかないが人当たりはよい。しかし人数かぞえが不器用。町の人は好意的であったが、ことドイツ捕虜に対する憎悪と比べたら大変な違いだった。

軍人は独ソ戦での捕虜経歴がシベリア行きとなるみたいだ。シナの少佐クラスでは正規の共産党

員といわれる人も視察にきた。

石にも「め」がある！

路盤構築に使う石は、層のあるものは割れるが丸石はなかなか割れるものではない。大ハンマーに細身の柄をつけて真つ向からたたたく。手がしびれるばかりで、はね返される。

ところがロシア人監督が二、三度振ると、大石が割れる。彼は言う、ここに「め」があるのだ、そこを打てばいいと。なかなかわからなかったが、なんとなく割れるようになる。小さくした石を一輪車で運ぶ。ノルマには大変だ。

まき割り。一抱えもの松の中心に数ミリの「め」がある。その方向で両端におのを入れ、最後に真ん中へ打ち込めば必ず真つ二つになる。このノルマは楽だった。雪の中、防寒衣なしで汗が出た。

三人組み二人挽きの鋸で一日に十二本伐採。小切りにして割って一・五メートルの高さに積む。

長さ十五メートルでノルマ完遂。午後三時にはできた。この積上げもコツがあつて、半円形のまきをうろこ形に積むと少ないまきで長い列となる。

あまりすぎ間が大きいと監督は腕を入れて皮肉を言うのだ、「ヤボンスキーよ、これを見ろ！」と。

これは、一冬を山小屋で過ごすまき作り作業で、暇があるので白樺細工の壁掛けなどをつくって五キロも山を下りて町の人と物々交換する者もいた。私は身近のパンフやソ連党史を読んだ。一九一七年の十月、レーニングラードに蜂起する革命軍の場面などに感動した。

そのときは、六十年後の平成六（一九九四）年七月にロシア旅行して、その広場に立つことができなんて思いも寄らず、ここで歴史上はじめて人民の政権ができたなどの感慨にひたることになるとは……。人の行く道は誰も分からない、さまざまである。

他に何もないう状態で活字に飢えていたから、日本新聞などが唯一の読みもので、これがいわゆる

マインドコントロールの道具となつたのか。私は洗脳されたとは思っていない。

確かに身の回りには社会主義の優位性とか、解説、宣伝のパンフレットばかりでしたが、一方、身近に見るシベリアの生活や風景はむしろ計画経済の欠点みたいな例が少なくなかった。特に教育の低さが目につき、なんでこんな連中に負けたのか割り切れなかつたものだ。

町には建物がまだいくらもできていないのに窓枠がほとんど運ばれて山積みになっていたり、青空市場の貧しい品揃えを見て考えさせられたものだ。

都会に遠い一寒村の見聞でソ連のことを云々するのはどうかと思うが、地方人とも囚人ともわからない人たちが、酷寒の地で我々と大して違わない食料で働いているのを見ると、この国は？と首をかしげてしまう。また、警備兵と作業監督が大口論して、零下三〇度の朝、「作業に出すな」「出せ！」と争っているのを見た。寒さに縮こ

まっけてたき火がうまくできないでいると、枯れ木を集めて火をつけてくれるロシア人に人情を感じる。

民主運動の活動家のアジ演説よりも、普通のと
きに見かける風景に、これは？　と思うことが多いのである。

しかし、日本新聞の紙面からは、生まれて初めて感動というか、そうだ！　というものがあつた。たとえば「天皇制」「階級」などという言葉は見たことも聞いたこともなかった。

初年兵のころ、大急ぎで軍装を整え宮庭に整列。「天皇陛下の命により陸軍大尉○○を大〇中隊長に任ず」。ラッパ吹奏。命下布達式であるが、なにをこのくそ忙しいのに！　と舌打ちしていた。内務班でぶん殴られるときも、これは朕の命であり有りがたく殴られなければならない。不動の姿勢で「お世話になりました！」なんて狂った会社だ。

はじめての生産競争・まき運搬

二一〇収容所はテルマの町外れにあった。流刑人でもいたのかひどい廃屋を手入れして四百人くらい入った。それでも大隊長とか大隊本部などと呼んだ。本部には旧軍の大尉・中尉・曹長らが出てソ連側からの指示を取り次いだ。通訳は日露漁業に勤めたという下士官がいた。

はじめての全員作業はまき運搬で、これは炊事・暖房に毎日欠かせないものだが、ソ連側の命令で仕方なしに動くというもので、できるだけ軽いものや細い枯れ木を探してのろろと歩いた。

そうしたら、各隊ごとに積み上げ、計量し、食事を加減するようになった。このころは、飯ごうで各隊ごとに「飯あげ」、宿舎で分配するやり方でした。体格のいい隊は増配があったぞなどわかるので、「オレのほうもがんばれや」なんて班長からハッパがかかる。体格のいい下士官連がモリモリ働くようになり、まきの山はたちまち大きくなったものだ。

ノルマ給の食事は間もなく廃された。一人一人に規定通りの給与が支給されているか等の、経理横流しなどのチェックもあった。増配が一定量の中でやりくりされていたらこれは本当の増配ではないわけである。

ノルマはあるが捕虜の規定で一日当たり黒パン三五〇グラム、野菜八〇〇グラム、砂糖一八グラム、その他肉、魚、たばこまで決まりがある。戦後の物資不足で不正、やみ横行はシベリアでも日本でも変わりなく、捕虜の上前をはねるやつもいた。

自分たちの暮らしに必要な物でも、受け止め方ではサボりもするし、無気力から立ち上がるということがわかった。しかしこの後、ノルマというものがある、いつでもどこでも切っても切れない生活になろうとは思っても寄らないことであった。

まきが大量に必要なのは入浴場、乾燥場であった。月二回入浴といっても、三人で一斗だるの湯

で体を洗うだけである。それでも生き返ったようになる。頭、腋毛、陰毛は床屋がそる。毛シラミが伝染病の媒介をするからである。この間に衣服は熱気消毒でシラミの卵も完全に殺菌された。

どっぷりと首までつかるお風呂をどんなにか待ちこがれたことか。四年目ころロシアのおけ(ボーチカ)に交代で入ったことがある。

南京虫の攻撃

これはひどいものだ。いくら作業の疲れで眠っていても刺されると目が覚め、一晚中攻められ寝不足になる。夜中に明かりをつけると、ぞろぞろ行列している。

上下二段、四人一組のベッドでトンボと呼んだ。部屋もきれいになったというのに、ついにベッドをバラして熱湯消毒で殲滅したことがある。

民主運動について

ソ連抑留者にとって民主運動は必ず通る関門である。真剣に受け入れた者、その場限りのおつき合いのようなあるいは全く反感を持って受け付けた人でもいただろう。私は進んで理解しようとしたし、前にも述べたように、社会主義・共産主義とはすばらしいものと受け入れました。

第一段階に、旧軍組織が否定されたこと、大いばりしていた曹長・軍曹が舎内当番になり、仕事帰りの我々に「ご苦労さんでした」なんて挨拶するようになり、皆から選ばれた人が団長となり、収容所の中が自主的に運営されるようになり、明るい雰囲気になったことは、運動を素早く広げるもとになりました。

ここでは反軍闘争とか激しいことはなかった。あつという間にソ連が将校を他へ分けてしまったのだ。軍医はいい人だったので残念であった。

講習会帰りのリーダーは何だか天下りの感じではあったが、委員の選挙とか集会などやっている

うちに落ち着いた。そうなると、寝てもさめても民主主義である。うまい歌なんかもできていて、これでいかなないと皆から浮きあがってしまうみたいになる。

侵略とか軍閥、封建的絶対主義天皇制あたりはわかった。史的唯物論なんてものが出てくると、もう物すごい。革命っていうものは大変なものだ……。

困ったことに私はほかの活動家のように「なんとかなんとかでガンバロウ！」なんてアジはできない。勉強会では居眠りで、真剣でない、と批判される。「同志〇〇」とお互いに呼ぶことになるが、何だか照れくさい。やっぱり「〇〇さん」だった。

私にできることは、せいぜい壁新聞をかくことぐらいだ。記事も苦心したが、絵の具が大変だ。赤は煉瓦の粉、緑や青は植物、黄色は泥柳の皮、紫はヨードチンキに飯粒をまぜるとヨウド澱粉反応で紫になる。壁絵をかく絵かきさんに聞いたり

した。

スターリンへの感謝決議・署名運動

民主運動もここまでくると誰かの作威を感じる
ことになる。しかしこれが大まじめに実施された
のだ。私は筆作りをした。毛皮の外套（シュー
バ）からとったり、硬軟いろいろの毛をまとめた
が、ひどいものでした。偉大なるソ同盟・スター
リンということで、これに賛成しないと反動分子
となるわけである。帰国を目前に「ふみ絵」のよ
うなものだ。誰が考えたものか民主運動の総仕上
げ、みんな署名はしたが、リーダーの民主委員で
も本当に感謝していただろうか？ 作業もしない
で保障された地位にいた者は、その点を感じた
ろうが、日本人としてこんなばかげた騒ぎには
苦々しく思っていたのではないだろうか。

捕虜だから仕方がないと思っていたが、実は国
際法違反であり独裁者の一言で抑留が決まってい
て、そんなことを知らないで操作されていたわけ

だ。シベリア民主運動の行き過ぎというか、率直
な発展をねじ曲げたなにかが……。

大きく見たら、後のソ連崩壊にもつながるもの
がなかっただろうか。

反軍闘争から民主化、

その先はソ側の政治指導か

どこまでがよくてどこからが行き過ぎとは区切
れないが、まず旧軍体制が否定され、階級がなく
なったことは大改革だ。最下級の兵士は地獄から
の解放だった。

「反ファシスト民主委員会」の選挙。初めて耳
にするもので五人連記制の投票だった。他に候補
者はなく、予定どおり決まる。何だかわけの分か
らないままズルズルと。これが民主運動なのかと
思った。委員は役割を決め、宣伝とか所内の整備
などソ側と打ち合わせながらやるわけだ。大小の
集会をやり、民主的な運営とか、作業能率をあげ
るための討論をやる。作業の指示は組長が集まっ

て受けて、組内で分担を決めた。以前のように一方的な命令はなくなった。

自主性ということで、食堂は金券なしで食事が出たり、遠い作業場にも温かい昼飯が馬車で届けられるようになった。宿舍も軽作業者が清掃したり、天井、壁は石灰で真っ白に塗ったのでぐんと明るくなった。このあたりは民主運動もいいものだったのだ。

「プロレタリアの祖国・ソ同盟の建設!!」なんてスローガンが出てくると、日本人捕虜がなんでロシアのために尽くすのか。しかし、これを疑問に表したり、ためらったら、これは日和見主義者であり、反動分子とみられるから、そんなことは話題にしない。

わずか三カ月の地区講習会から帰ると、たいした理論家になり、ソ同盟の社会主義に学べなどとプチあげる。そんなときには「同感!」「賛成!」と共鳴しなければいけない。これには困った。わけもわからないで「賛成」なんて大声をだすのは

苦手だ。

相互批判というのは、先にやったほうが勝ち。勉強会で居眠りしているのを見つけたら、同志○
○は熱意がない! と指摘する。昼間の作業で疲れているのに欠席もできない。

「民主運動とはつらいもの」、こんなことはお互いあまり口にしない。誰に聞かれるかわからないから、帰国のことや故郷の話で過ごすのだ。

ノルマを完遂して賃金をもらえることで、作業成績が上がったこともあり、余裕ができたこと、帰国の望みがあることは毎日が違ってきた。

運動はこれと結びつき、強制されてやるというのが減って、ほんの少しであるが進んでやるという面が出た。大都市では、器用な日本人がロシア人の二〜三倍の仕事をこなして、日本新聞に載り、これに続けと宣伝された。

建築の煉瓦積みでも丸太積みでも、高さが低いうちは能率がよいが、だんだん高くなるとすべて

人力でやるには限度があつて、材料を担ぎ上げるのが大変だ。

土工や運搬は力だけが頼り、大工・左官は技術が加わりノルマがいい。二〇〇%とか三〇〇%できたというのも報告に何かの操作があつたのではないかと思う……。

民主運動の高揚と評価するには疑問がある。とにかく輸送船が動いてくれないことにはどうにもならない。当時の占領軍司令部、対日理事会、極東委員会などが絡み合つていた。事情は新聞ではよくわからなかつた。米ソの対立は私たちの帰国を遅らせたのではなかつたかと思うが、本当はどうなのだろうか？

黒パンと「メーデー」のこと

こんな美味しいものはないとまで思った「黒パン」には、みな色々の思い出があるだろう。

初めのころは燕麦の殻が多くてひどかつた。食べるとチクチクしたり、水気が多いものがあつ

た。パン焼きが原料をごまかしたりする。

一個四キログラムの大きいやつをまくらにして思うさま食べてみたいなんて思ったものだ。あの酸味は小麦を醗酵させたイースト菌でアルコール分もあるので、職人が飲んでいい気持ちになつていたりする。ロシアの町で「クワス」といつて売っているのがそれだ。

パンが黒いのは、小麦のほかの雑穀による。コウリヤンでは赤みがかかるし、アワが多いと黄色になる。大麦でも精白しなければ真っ白なパンにはならない。いずれにしてもあの懐かしい味は忘れられない。

今、ロシアに旅行すると、ホテルでは白いパンも出るが、私はやっぱり黒パンに手が出る。

五月のメーデーは休日であつた。十ループルでパンを買い、寝台で食べて昼寝したら大満足であつた。ロシア人は広場でダンスをやつていた。メーデーつていいものだ。

帰国して日雇い労働者でメーデーに参加したと

きは、皆にメーデーの説明をし、メーデー歌を教えたりプラカードを作ったり、とても大変。県労連のあとにくっついて歩くのに、おじさん、おばさんたちは大汗をかいたものでした。それが戦後のメーデー。今は分裂したままデモもやらない。シベリアの収容所ではちゃんと集会とデモをやったのに。今や八時間労働どころかタダで時間をやらされても文句言えないとは情けない。

メーデーのあと映画があった。町の小さなホールで、一々二ルーブルで希望者だけ行った。もちろん、ロシア映画で白黒。発声も悪い。そのうえ解説が下手くそ。「これは何々であります」式。会話の情緒もなにもあったものではない。当時のことだから戦意高揚のものが多い。「ミチュエリン」「チャバーエフ」など伝記ものなど。

昭和二十三年のモスフィルム作品「シベリア物語」は、解説が下手でも、わりに単純なメロドラマなのでおもしろく観た。シベリアの雄大な風景は、日本で公開されたときも皆感嘆したと思う

が、そこで働いていた抑留者にどれほどの想いが至ったものだろうかと思う。とにかくきれいだった。「石の花」とともにソ連映画を大きく見直したのではないだろうか。

しかし、これもウラをみると、ドイツの技術を戦争でそっくり持ってきたものと分かる。その手で原爆も取り込んだのかと思うとがっかりさせられる。

トルストイやゴリキーのロシアである。技術はともかく中身のいいものをこれからも期待したいものです。

つらい作業の中で見つけるゆとり

いろいろやった、強制労働！ それらをやらなければメシがない、生きるため！

凍土へのつるはしのきかないこと。三倍も四倍も手数をかけて一かけらずつ掘る側溝掘り。起重機は夜も動いているので、土砂を積んだ貨車が夜中でも来る。真っ暗なので、車軸受けのオイルを

ポロに取って燃やす。やっとおろして仮眠。またすぐ汽笛で起きる。貨車は規定時間に空けなければならぬ。眠いのと疲れでやせた。

草刈り作業隊にかわった。草刈り場は山の中、沼や湿地で囲まれている。大鎌と小鎌では一日に刈る基準面積が違う。刈った草は干して積み上げる、四×六メートルで家型に。これは意外に骨が折れた。草の多い所はいいが、遠くから運ぶのは手間がかかり暗くなるまで働くことになる。

冬季、沼も湿地も凍ると、この乾草はそりで運び出す。貴重な飼料である。

原野にはキノコが多い。色、裂け具合、匂いなどでおおよその選別をした。よそでは毒キノコにあたったと聞いたが、自分たちはなかった。多く食べると下痢するのはあった。シメジ系が多く、夏さまず系はすごく大きくて茎をあぶるとうまい。塩がないのが残念だった。

この草刈り場（セナコース）には、ほかにロシア女囚の一組がいた。すごい体格で、白夜の宵に

は夕食のあと連れ立って散歩をしたり歌を唄っていた。私たちのやせかけた男などには目もくれなかったか、とにかく何事も起こらなかった。

山の暮らしは町の収容所と違いミーティングもないし演説もないので気楽だ。週一回、炊事のやりくりで、特別食といつて内地の「おはぎ」とか「すし」に似せたものが出る、故郷を懐かしみ話がつきなかった。しかし、山だ。炊事係が水汲みに行ったらオオカミの足跡を見て青くなって帰ったとか。私も遠くからオオカミを見たことがある。

夏は草刈りでツチバチの巣を見つけると甘い蜂蜜にありつけたし、蜂の子はスコップで炒って食べた。低い灌木の木の実も、赤や紫の何種類もあり、ビタミン源だ。カラマツの新芽を煎じたのを飲むと重い足が軽くなる。慣れると松葉臭いのも飲めるようになるのだ。

続いて食べ物のこと

糧秣は初めからしまいまで粗末であった。ただ、横流しなどが規正されたし、現地の物資も多くなったのではないかと思う。

私たちに配布される黒パンは一日に三五〇グラム。一斤は六〇〇グラムであるから、目方からいうと現在市販されている食パン一斤の約半分である。しかし、黒パンは目方があったから、大きさは一斤の四分の一ほどであった。

このほかに、飯ごうに半分くらいのお粥と、飯ごうのふたに一杯の野菜スープが三度の食事だった。これだけで八時間以上の重労働をするのだから、とても体がもたない。

二一〇収容所のころ、かますに入ったもみ米が入った。器用な大工さんが松の太木からひきうすと唐箕とうみを作った。これでもみすりしてアラヌカをとり玄米で炊事に回した。

朝鮮の米だったが、これは短期間でしたがお粥が食べられた。魚は一日八〇グラム、肉七五グラ

ムとなつていているが、塩鱒かカレイばかりで肉など見たこともない。ソーセージがスープにわずかに入っていた。

アワ・ヒエ・燕麦・コウリヤンなどが粥で出る。時には精白しないもので、三〇〇グラムの黒パンを三回に分けたら、タバコくらいしかないもので、これは昼と夜にした。白いパンと違って重いから黒パンは小さい。パンとスープと粥、これが規定の食事。

乾燥野菜はもちろん、トマトのロシア漬までスープに入れてしまうので、新鮮な野菜が食べられない。食べられそうな野草を探した。毒草にやられた人もいる。

漢方に甘草という下剤の薬草がある、白い根元は柔らかくて甘みがある。たくさん食べなければうまい野草だ。

秋の収穫期

農場の作業に行った。ジャガイモ掘り、畝三本

を受けてもって進むと途中でお昼になる。随分広い畑だ。はるか地平線近くにトラクターが動いている。

広い土地に粗い耕作で、大農式というのか単位面積当たりの収穫は少ない。機械でやるにしてもこれではもったいないと思う。ジャガイモをトラックで運びだすまでに霜がかからないように茎をかぶせる。もう霜の降りる季節になっていたのだ。芋・ニンジン・キャベツ・ビートを半地下式の野菜貯蔵庫に入れ、冬に備える。

三食ジャガイモが出て、参った。山^{ヤマウツド}独活の盛りには、においの強いこれのごつりスープに入っている。何でも近くにあるものを利用し、健康を維持するのが大事なのだが、環境になれるとせいたくなもので、あれはまずい、これは嫌い、なんて言い出す。人間の弱さ。

石油貯蔵庫の勤務

町には発電所、製材所、糧秣貯蔵庫などがあつ

た。石油貯蔵庫の手伝いは一人で行った。重油のタンク車が入ると二人作業。これはポンプをもむのには二人が必要だからである。重油は粘度が高い。三、四トンのタンク車が入ったら地獄だ。

ポンプ作業は全く単調で、終わりが見えない。タンクの下でたき火をして少しでも楽になるかなどしてみても重い。腕も腰も痛くて巨大なタンクが恨めしい。

ガソリンや石油をドラム缶から出すのにホースを口で吸ってサイフォンにする。毎回うまくできればいいが、あつという間に口の中へ！ 気持ちの悪いこと。簡単な道具がない。所長などは平気でやっている。

運転手と伝票を間にケンケンガクガクとやっている。言葉はわからないが激しい口論だ。厳しい配給制なのだろう。アメリカのトラックが多かった。

一度、糧秣庫に行ったが、砂糖袋も塩も重くて、塩魚のたるなど動かすのがやっとで、何の余

禄もなかった。

以前のように監督が付ききりで仕事をするよりは気分的によくはなったが、どこに行ってもロシア人より体力がないので苦勞する。

四年目の秋、待ちに待った帰国!!

毎年、春が来ると、今年は！と期待し、冬を迎えて来年をと願っていた。

自分らが乗る列車が入り、整備・飾りつけをしているのにまだ本気になれない。新しい衣服をもらい、雑のうに土産のタバコなどを入れた。書いたものはメモ一枚でもダメである。

四年暮らしたテルマの町よ、さようなら。自分たちが整備した鉄道線路を帰国の列車は走っている。去年伐採した山は丸坊主になっている。切り株まで掘り起こして松の実をまいた。

あの丘は何年で元にもどるのか。あそこの草原のヤカタは、歩かないで飯ごうはいっぱいになった。

手を振っているロシア人がいる。ドスベダーニヤ!

集結地ナホトカに着いて、すでに大勢集まっているのに驚いた。ここで船が入るのを待つのだ。

地域の差が、服装に見られる。手作りのトランクを提げた一団が入ってきたり、売店で買い物をしている連中はよほど恵まれた環境にいたのだろう。タシケントから来たと聞いた。あとでわかったのだが、タシケントといっても炭鋳労働はひどいものであったという。

九八年に訪ソしたとき、抑留者が造った劇場が今も使われているのを見た。都市と山間の格差がいろいろの面であったのだ。地区演劇隊の公演「プラーグの栗並木(?)」とか、独軍占領下の抵抗がテーマで、映画の「若き親衛隊」をより市民側にしたような感じで、さすがにうまい。

船が来た。名前を呼ばれ船に上がっていきとぎ、震えるような感慨でした。

そして舞鶴入港の感激。上陸直前、MPが「歌

を唄ったりしてはいけない」と指示した。委員長が「足並みをそろえるのは」と聞いたら、すごいけんまくで「名前を！」と。初めてMP・占領軍を目にした。

舞鶴の引揚援護局施設で、届いていた手紙や写真。まさに帰心矢の如しだ。

上野駅に父と従兄弟が出迎えてくれた。このころになって五軒町の兼子さんが同じ収容所において一緒に帰国したことがわかった。引揚者が極端な行動に走るため、各地元では出迎え体勢で騒ぎを防いだ。水戸駅前にも大勢いた。

日立から出征したのだから、水戸のご近所は知らない。私の家族は笠原開拓をしていたのだ。

庭先に迎えてくれた母は、小さかった。ご近所は先に帰国した方もいて、皆さん開拓の人でした。生まれたばかりで別れた弟も五つになっていった。一町二反五畝の開墾地の生活が始まるのでした。

○抑留から得たもの

なにが無くとも驚かない。あるもので工夫すること。

食べ物に文句は言わない。

貧乏は恥ずかしいことではない。

世のなかは、いいほうに進むはずだ。

ところが、あれから五十年以上もたつと、暖かい環境に慣れてこれらの信念は少しずつ薄れてしまっている。二十六戸の開拓農家が全部宅地になり、そして、数百戸の住宅がさらに増えつつある町と化しています。

今ここで零下三〇度の経験は再現できず、月日の経過とともに抑留の思い出も苦しい思い出も希薄になってきた。しかしあのつらさ悔しさが何で起きたのか、あれは一体何だったのか、はっきりさせること、たくさんの人にわかってもらうことが必要です。二度とあんなことが起きないように。

九二年、シベリア鉄道旅行で、ハバロフスクの日本人墓地に墓参した。今はハバロフスク―新潟間が二時間である。ここまでたどり着き、異郷に倒れた人たちを思い、悔しきで涙がとまらなかった。

八月十五日の前後

昭和二十(一九四五)年八月六日、広島に原爆、そして長崎。九日にはソ連参戦。十五日無条件降伏。ここに至る状況について、私たちは何も知らなかった。三月の東京空襲もあとで知った。

六月、沖繩の全滅、水戸・日立の艦砲射撃なども知らないで、本土決戦とはどんなことをやるのか、焼け野原で竹やりで戦うなんてことは想像もつかないことでした。

私は三月から東満の国境地帯からハルピンの教育隊に転属していた。周囲が山ばかりの所から初めて赤い夕日の満州に来た。地平線まで雪原の続く眺めでした。ここは各部隊から派遣された一等

兵から兵長まで、下士官教育の自動車整備をやる部隊。

初年兵の淵野辺で教育が行われた。機甲整備学校練習隊だから、また同じことをやるわけで気が楽でした。

意地悪な古兵もいないし、外出はハルピン市街のビヤホールで軍人優先でビールを飲んだり、劇場に入ったってきた。益田隆の舞踊団が来ていた。空襲はないし満州はテンホー(最高)だった。

一年もすれば原隊復帰で、やがて下士官にもなれる。営外居住になったら親たちも呼んでやろうかなんて夢を描いていた。実は上等兵になってもまだ歩哨係も勤めていない。はなはだ未熟な、車の運転もできない技術兵なのでした。

そして八月の大詔奉戴日の翌日、原隊から准尉さんが来て、東満国境の虎林・虎頭はソ連軍の戦車でじゅうりんされ私らの部隊はなくなると知らされた。そのうち飛行場にソ連空挺隊が降下す

るという。武器はなくスコップだけで出動、タコ壺で一夜を明かした。ここで死んでも親たちが無事に暮らしていけるならこれでいいと自分に言い聞かせて。

部隊本部の指示はくるくる変わり、十五日の停戦命令で落ち着いた。

原隊は第十八野戦兵器廠で、昨年から南方への転属が続いていた。ついには旋盤・ボール盤などの工作機械まで、徹夜作業で移動したので、南方戦線はよほど急をついているのだなと感じてはいましたが、こんなことになろうとは思ってもありませんでした。まだ兵営にいる限り敗戦の感じは弱かった。このあたりは敵軍が見えないのだから、今思うと、空襲で焼け出され、ろくな食事もとれないで苦労した内地の人たちに比べると、申しわけないみたいだったのです。戦争が終わり、まずほっとしたのは、本部前の防空壕掘りがなくなると、点呼もないということでした。

【執筆者の紹介】

大正十二年九月

茨城県水戸市笠原町に出生

昭和十五年三月

株式会社日立製作所入社

日立研究所勤務

同 十八年十二月

応召 神奈川県兵器部隊に

入隊

同 十九年三月

満州第十八野戦兵器廠に転

属

同 二十年八月

ハルピン教育隊にて終戦

抑留となる

主たる抑留地

(シベリア イズベストコーワヤ テルマ地区)

昭和二十四年十月三十一日 明優丸にて帰還

水戸市笠原町に帰る

同 二十五年一月以降 九年間日雇労働に従事

同 三十三年十月 三上測量設計事務所勤務

同 六十三年十二月 同社退職 現在に至る

(茨城県 豊田 耕八)